Electronic Journal of Central European Studies in Japan
Special Issue in Memory of Professor Nobuhiro Shiba (March 2022)

故 柴 宜弘さんの個人的な思い出

長與　進（早稲田大学名誉教授）

長與進です。ぼくは柴宜弘さんとほぼ同世代に属して[1]、1970 年代に同じ「東欧」（当時はこの地域を一括してそう呼んでいました）研究を志した者として、柴さんはつねに身近な存在でした。

柴さんについての最初の記憶は、1974 年、いまから半世紀近く前の話です。当時ぼくは早稲田大学大学院の露文専攻に在籍して、ロシア語を勉強していましたが、文学と合わせて歴史にも関心があり、西洋史専攻のロシア史の山本俊朗教授の大学院ゼミにも出席させてもらっていました。あるとき教室に行くと、入り口のところでゼミ生の一人に、「今日はゼミの発表会があるので、講義はありません」と言われましたが、それが柴さんでした。そのときの彼の済まなさそうな、申し訳なさそうな表情が、いまでも記憶に残っています。柴さんが申し訳なく思う理由はなにもないのですが、この彼の柔和さ、というか、暖かい人間味は、それから折に触れてお付合いするなかで、繰り返し感じたことです。一言でいうと洗練された、人の気持ちをいたわることのできる、根っからのジェントルマンとでも言うのでしょうか。

話は 1980 年代に飛びます。当時組織されたばかりの東欧史研究会が、活発な活動を展開していましたが、柴さんは気鋭の「ユーゴスラヴィア」研究者として、同研究会の中心メンバーの一人でした。この地域の研究者たちが、1985 年に朝日カルチャーセンターで、「東欧」各国についてオムニバス形式の連続講演会をひらき、後にこの講演は活字化されて、『東欧の民族と文化』[2]という本になりました。この本が出版されたのは 1989 年 2 月のことで、中欧・東欧における劇的な体制転換の直前のことでした。

この本のなかで「ユーゴスラヴィアの民族」の章を担当された柴さんは、1985 年頃の状況を踏まえて、ユーゴスラヴィアの複雑な民族構成をわかりやすく解説し、とくに「ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人問題」、「マケドニア問題」、「コソヴォのアルバニア人問題」に焦点を当てて、冷静な現状分析を展開されました。その論考の末尾で柴さんは、こう書いておられます。―「こういうふうに見てきますと、きょうは問題のある地域だけを取り上げたわけ

[1] 柴宜弘さんは 1946 年生まれ、長與は 1948 年生まれ。

[2] 南塚信吾編『東欧の民族と文化』（彩流社、1989 年）

で、ユーゴスラヴィアはすぐにも分解しかねないということになるかもしれません。しかしながらユーゴスラヴィアでとられている連邦制は・・・民族政策としては非常に公正な政策だと言えます」[3]。この部分は、当時ひじょうに強くぼくの印象に残りました。残念なことに現実の歴史の展開は、柴さんの「楽観論」を裏切るかたちになってしまいましたが、ここで強調しておきたいのは、錯綜した民族問題に、つねに「解決への方向性の模索」と「希望」をもって取り組まれた、研究者としての柴さんのヒューマンな基本姿勢です。

次にお話ししたいのは、柴さんがお書きになった「ウ・ボイをめぐって」という短いエッセイのことです。ご記憶の方もあるかと思いますが、このエッセイは、柴さんも編者のお一人だった『クロアチアを知るための 60 章』[4]に掲載されたものです。日本の男声合唱団のあいだで歌い継がれていた「ウ・ボイ」という曲が、クロアチアの作曲家イヴァン・ザイツのオペラ「ニコラ・シュビチ・ズリンスキ」を出典とすることを明らかにしたもので、柴さんは、この曲は 1919 年秋のチェコスロヴァキア軍団の、いわゆるヘフロン号事件を介して日本に伝えられた、と書いておられます。

このエッセイの末尾で柴さんは、次の三つの疑問点を投げかけられました。―第一に「なぜ、チェコスロヴァキア軍団の将兵がクロアチアの曲を歌っていたのだろうか」、第二に「この曲が日本に伝えられた当初、「セルビア戦歌」とされたのは、なぜだったのだろうか」、そして第三として「チェコスロヴァキア軍団のなかでは、「ウ・ボイ」がセルビアと結びつけられ、「戦歌」とされていたのだろうか、あるいは、神戸に滞在したチェコスロヴァキア軍団兵士のなかに、ダルマツィア出身のセルビア人がいたのだろうか」[5]

ぼくは最近、チェコスロヴァキア軍団がロシアで刊行していた『チェコスロヴァキア日刊新聞』のことを調べていて、そのなかで、軍団が合唱団などの文化活動も活発に展開して、彼らはチェコとスロヴァキアの歌だけでなく、ロシアや「南スラヴ」の歌も、レパートリーに加えていたという記述を見つけました。またヘフロン号の将兵たちは神戸に滞在していた時期に、ソコル体操やオーケストラとならんで合唱団活動も披露して、日本の聴衆を魅了したという記述もあります。

ですからいずれ柴さんに、こうお伝えするつもりでした。－「柴さん、軍団がクロアチアの曲を歌っていたことは、確かなようです。

---

[3] 同上、261－262 頁

[4] 柴宜弘・石田信一編著『クロアチアを知るための 60 章』（明石書店、2013 年）

[5] 同上、315 頁

でも当時彼らはそれを、「南スラヴ」の歌と理解していて、クロアチアかセルビアかという区別には、無頓着だったのではないでしょうか。ちなみにぼく〔長與〕が目を通したかぎりの資料によると、神戸に滞在した軍団兵士のなかに、セルビア人あるいはクロアチア人が混じっていたことはないようです」。柴さんはきっと膝を乗り出しながら、やさしく微笑んで、「なるほど、そうでしたか。もっと詳しい事情がわかると面白いですね」とおっしゃってくださったのではないでしょうか。その機会を逃してしまいました。たいへんに悔やんでいます。ちなみに柴さんのこのエッセイは、ヘフロン事件のアウトラインを明らかにした、日本で最初の文献だろうと思います。

最後に柴さんにお目にかかったのは、確か 2017 年の秋だったでしょうか。ご存知の方もあるかと思いますが、当時この季節に（ちょうど今頃ですが）、早稲田大学の本部キャンパスで古本市が開かれていました。キャンパスの片隅に大きなテントをはって、十店以上の古書籍店が、学術書を中心として店を広げていました。そこでばったり柴さんにお目にかかったのです。

もう東京大学を定年退官された後だったと思いますが、変わらぬ知識欲と旺盛な好奇心をお持ちだなあ、と感心したことを思い出します。短い立ち話でしたが、また近いうちに会って、ゆっくりと話しましょうよ、と言って別れたのが、最後になってしまいました。ぼくも二、三年後には退職を控えていた時期でしたし、さきほど申し上げた「ウ・ボイ」の顛末のこともあり、いずれゆっくり話しましょう、は本心からの願いだったのですが、叶わぬ夢になってしまいました。このときも柴さんのスマートさ、というか爽やかさは、最初にお目にかかったときとまったく変わっていませんでした。

ですから今年〔2021 年〕の 5 月末に、メールを通じてご逝去の知らせを受けたときは、文字通り晴天の霹靂でした。まさか、という以外の言葉が出てきませんでした。あまりに急なことでお葬式にも失礼してしまい、かろうじて弔電をお送りするのが、できたことのすべてでした。

その後しばらくたって、ご遺著になってしまった『ユーゴスラヴィア現代史　新版』[6]を送っていただきました。柴さんと対話するつもりで、あらためて襟をただして拝読しました。柴さんがユーゴスラヴィア研究を志されたもともとの動機が、「パルチザン戦争」、「労働者自主管理」、そして「非同盟政策」という、第二次世界大戦後の第二のユーゴスラヴィアの三本柱の理念であったことを、改めて感じました。柴さんは東西冷戦下のユーゴスラヴィアのこうした理念

[6] 『ユーゴスラヴィア現代史　新版』（岩波書店、2021 年）

に、大きな共感を寄せて、そのなかに「希望」を見ておられたのだろうと思います。

その柴さんが、この国の「無残な」解体過程を記述する巡り合わせになったことは、「歴史の皮肉」と言わなければなりません。しかしこの遺著をお読みになった方はおわかりだと思いますが、そのなかでも柴さんは、解決に向かうポジティヴな方向性をなんとか見いだそうと努めておられます。

このご本の最終章「歴史としてのユーゴスラヴィア」で、昨年 2020 年のボスニアの地方選挙において、民族主義政党が敗北して、「民族を基盤としない社会民主党系の政党が勢いを増し、民族の分断を越えて、ボスニアを一つにする機運が高まっている」[7]と書いておられます。柴さんは最後のご著書においても、「解決への方向性」を模索されて、ヒューマンな基本姿勢を貫かれた、と言うことができるのではないかと思います。研究者として、筋を通されたのだと思います。

改めて柴宜弘さんのご遺徳をしのび、安らかなご冥福をお祈り申し上げます。

---

[7] 同上、265 頁